

神戸女学院所蔵資料に見る由起しげ子の音楽教育歴

津 上 智 実

**YUKI Shigeko's Music Education: An Investigation by Means of the Historical
Materials Owned by Kobe College**

TSUGAMI Motomi

神戸女学院大学 音楽学部・音楽学科 教授

連絡先：津上智実 〒662-8505 西宮市岡田山4-1 神戸女学院大学 音楽学部・音楽学科
ZAT03327@nifty.com

Summary

This paper aims to outline the music education given to YUKI Shigeko (1900–1969), a female writer and the first Akutagawa Prize winner after the Second World War in 1949, through the examination of the historical materials donated to and owned by Kobe College as the YUKI Shigeko Library.

YUKI Shigeko being her pen name, her original name is IHARA néé SHINKAI Shige. She entered the Music School of Kobe College in April 1918 and left it in January 1921.

In this paper the following three points are examined: 1) Music education she received in Kobe College, 2) her master–pupil relationship with YAMADA Kósçak (1886–1965), and 3) their relationship in their lives.

1) Lesson Notebook of the Music School of Kobe College (1907–1923) tells us that she had piano, organ and vocal lessons in the Spring and Fall terms of 1918 and Winter term of 1919, and that the materials she studied were mainly for beginners. Without receiving any piano lessons in her childhood, she seems to have been rather slow in her hand movement.

2) Concerning her master–pupil relationship with YAMADA, the opinions of scholars diverge, especially on its beginning time. Through a close investigation of the related materials, it has become clear that they met for the first time on the 25th February 1917 in Osaka Hotel, and at that time she became his pupil. However the YUKI Shigeko Library does not contain any music piece composed by YUKI, but only some notes and notebooks, which show her study of counterpoint.

3) Although her study of composition with YAMADA stopped because of her hospitalization, followed by her marriage and stay in Europe, their personal contact continued all through their lives, as testified by their letters and writings in journals as well as some printed music books signed by YAMADA with a dedication to YUKI.

Keywords: YUKI Shigeko, YAMADA Kósçak, music education, Kobe College, IHARA Usaburo

要 旨

本論では、戦後初の芥川賞受賞作家として知られる由起しげ子（1900～1969）について、神戸女学院音楽部在学時（1918～1921）とその前後の音楽教育歴の輪郭を、本学所蔵資料によって描き出すことを目的とする。

「由起しげ子」は本名を「伊原（旧姓、新飼）志げ」と言う。新飼志げは17歳の1918年4月に神戸女学院音楽部に入学し、20歳の1921年1月に中退している。

ここでは、1）音楽部在学時の音楽教育、2）山田耕筰（1886～1965）との師弟関係、3）山田耕筰との交流を示す資料について、その概略を描き出す。

- 1）神戸女学院大学図書館所蔵の「音楽部レッスン帳」（1907～1923）によれば、新飼志げは1918年春学期と秋学期、1919年冬学期の3学期間にピアノとオルガンと歌のレッスンを並行して受けており、その教材は主に初学者用のものであったと判明した。幼少期にピアノを習う機会を与えられなかったため、必ずしも手が回る弾き手ではなかったようである。
- 2）山田耕筰との師弟関係については、特にその始まりがいつであったかという点で先行研究には大きなばらつきが見られるが、関連史料を精査した結果、1917年2月25日の大阪ホテルでの出会いが最初で、その際に新飼は山田に弟子入りを許されたというのが一番事実に近いという結論に達した。「由起しげ子文庫」には新飼の作曲作品は含まれておらず、対位法の勉強の跡を示す簡単な譜例とメモが残されているだけである。
- 3）由起の長期入院と結婚・渡欧によって作曲の勉強は放棄されたが、それでも山田との交流は生涯にわたって続いたことが、「由起しげ子文庫」所蔵の山田耕筰の署名と献辞入りの出版譜や書簡、また後年の両者の執筆物から明らかとなった。

キーワード：由起しげ子、山田耕筰、音楽教育、神戸女学院、伊原宇三郎

はじめに

本論では、戦後初の芥川賞受賞作家として知られる由起しげ子（1900～1969）について、神戸女学院音楽部在学時（1918～1921）とその前後の音楽教育歴の輪郭を、本学所蔵資料によって描き出すことを目的とする。

「由起しげ子」は戦後のペンネームであって、本名を「伊原（旧姓、新飼）志げ」と言う。新飼志げは1900（明治33）年12月2日生まれで、大阪府泉北郡高石尋常小学校、大阪府立堺高等女学校（現在の泉陽高等学校）を卒業後、プール女学校別科（英語）を経て、17歳の1918年4月に神戸女学院音楽部に入学し、20歳の1921年1月に中退している¹。

そこで、まず1）音楽部在学時の音楽教育、次に2）山田耕筰（1886～1965）との師弟関係、最後に3）山田耕筰との交流を示す資料について、その概略を描き出してみたい。

1）音楽部在学時の音楽教育

新飼志げが本学音楽部で受けた専門教育については、神戸女学院大学図書館所蔵「音楽部レッスン帳」が具体的な情報を与えてくれる。「音楽部レッスン帳」はマーブル紙の大判のノートで、表紙には「音楽部 学生名簿・成績簿 1907（明40）～1923（大12）」とシャーロット・B. デフォレスト Charlotte Burgis De Forest（1879～1973）の手で書かれている。その内実は何年の何学期にどの学生がどの曲のレッスンを受けたかという記録である²。新飼志げについては、1918年春学期と秋学期（112頁）、1919年冬学期（113頁）の計3学期分の記録が残されている。その記載内容を表1に示す。

-
- 1 吉村稔「由起しげ子論～神戸女学院と芥川賞作家の世界」（『神戸女学院百年史各論』神戸女学院、1981）611～635頁。
 - 2 詳細は、津上智実「神戸女学院音楽部レッスン帳（1907～1923）の資料的価値とその内実」（神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』57-2 2010.12）141～153頁参照。

1-1) レッスン曲の内容

表1 から明らかなように、新飼志げはピアノとオルガンと歌の3種のレッスンを平行して受けている。1910年代半ばの神戸女学院音楽部においては、ピア

表1：新飼志げのレッスン曲

1918年春学期：T. Hasegawa

	[基礎練習]	[練習曲]	[楽曲]
Piano	Duvernoy, Op.120, Nos. 6, 7, 8 Köhler, Band I. a, No.5; Op.55, No.2	Lenz- <i>Classical Album for the Young</i> , Nos.15, 27, 28, 32	Mathews <i>1st & 2nd Grade Pieces</i> , Soldiers' March, Petit Scherzando, Among the Gypsies, Lullaby
Organ	Scale C, G, D Wolf- <i>Little Pischna</i> , 1, 2, 3 Kunz, <i>Canons</i> , 1-6 Nakata-Soshunmu [sic] ^註	<i>Landon Reed Organ Method</i> , 175, 155, 150, 93, (58 every key)	<i>Harmonium Album</i> , Band I, Nos. 7, 17, 28; Vol VII, Adagio Religioso Calonne
Vocal	Concone 1-6,	Theory, A Singing	

1918年秋学期：Miss Nagamatsu

Piano	Scale, All #, + F, B b both hands, similar motion	Czerny, Op.849, Nos.1-7 Clementi Sonatine, Bk1, Op.36, 3&4	Heller, Op.47 No.2, 21, 9.
Organ	Scale, All #, + F (same as above) <i>Shimazaki-Organ Method</i> , Bk II, Pg 1-9.	<i>Estey Organ School</i> , Popular Air of France & Switzerland.	<i>Harmonium Album</i> , Bk VII, No.1. <i>Sudd-Easy Method</i> , Nos. 1, 2, 3.
Vocal	Vocal, Harmony (1 st Inversion)	A Singing	

1919年冬学期

Piano	Scale 4 in similar mot. Scale 4 both hands 3 + 6. Czerney Op.849, 8-13.	Kuhlau, Sonatine Op.20, No.1; Op.55, No.1. Haydn- Andante from Sym. (Surprise)	Heller-Op.47, No.16, 10, 23. Rosey-Longing for Home (mem.)
Vocal	A Singing	Harmony (Inversions of Secondary Chords)	

注 中田章作曲「早春賦」(吉丸一昌作詞、1913) のことと思われる。

ノのみを学ぶ生徒が主流になっていたが、それでもオルガンのみ、あるいはオルガンとピアノを併習する生徒も一定数見られた。しかるに1918年になると、もはやピアノが主流で、オルガンを学ぶ生徒はほとんどいなくなってしまう³。その中で新飼志げは例外的な存在であったとすることができる。おそらくこれは新飼志げが教会で音楽と出会い、教会関係者によって音楽の手ほどきを受けてきたという来歴（後述）と関連しているのであろう。

音楽部レッスン帳は縦に3つのコラムに書き分けられていて、表1に追記したように、「基礎練習」「練習曲」「楽曲」と呼ぶべき3分野に分けて記載されている。現在でもピアノのレッスンは、ハノンなどの「指練習」から始まって、チェルニーなどの「練習曲」、そしてベートーヴェンなどの「曲」と3分野をセットで学ぶことが多いが、これは大正初期の本学音楽部でも同じであったと見える。

表1のピアノ曲の内、カール・チェルニーの作品849は『チェルニー30番練習曲』として今日でも知られている練習曲集で、新飼志げは1918年秋学期にその第1番から第7番、続いて1919年冬学期に第8番から第13番までを学んでいる。1918年秋学期に弾いたクレメンティのソナチネ（作品36）と1919年冬学期のクーラウのソナチネ（作品20の第1番、作品55の第1番）も、今日『ソナチネ・アルバム』に収められてピアノの初学者には親しい曲である。

一方、オルガン曲の中で興味深いのは『ハルモニウム・アルバム *Harmonium Album*』第1巻である。この曲集の第7番はロシア民謡〈緋色のサラファン *Näh' nicht, liebes Mütterlein*〉の4声体の器楽編曲（四分の二拍子、44小節）、第17番はヘンデルのオラトリオ《マカベウスのユダ》から〈見よ、勇者は帰る *Seht, er kommt mit Preis gekrönt*〉の器楽編曲（二分の二拍子、88小節）、第28番はカール・マリア・フォン・ウェーバーのオペラ《オベロン》より〈おお、潮の満ち引きの何と美しいことよ *O, wie wogt es sich schön auf*

3 津上智実「明治期の鍵盤楽器の導入教育～『神戸女学院音楽部レッスン帳』の古層（1900～1902）を考える」（神戸女学院大学女性学インスティテュート『女性学評論』29 2015.3）133～151頁。

der Fluth) の器楽編曲 (八分の六拍子、53小節) で、これら 3 曲を新飼志げは 1918 年春学期にオルガンで学んでいる。加えて 1919 年冬学期にピアノで学んだハイドンの驚愕交響曲の緩徐楽章も、同じ曲集に第 33 曲として収められており、これを弾いた可能性が考えられる。

1-2) 指導者

音楽部レッスン帳において、学期名の横に「T. Hasegawa」および「Miss Nagamatsu」とあるのは指導担当者名を示している。前者は、1917 年 9 月から 1919 年 3 月まで音楽部の助教員を務めた長谷川 (新姓奥村) ツヤ、後者は 1914 年 4 月から 1923 年 7 月まで同じく助教師を務めた永松 (新姓永野) 貞のことで⁴、両名とも神戸女学院の卒業生である⁵。

1-3) 由起の演奏技量

このように見てくると、本学音楽部在学時の新飼志げは、ピアノについては初心者に近い技量の持ち主であったと思われる。由起自身、『群像』第 14 巻第 8 号 (1959 年 8 月) の「文学自伝」というコーナーに寄稿した「接ぎ木の枝」(184~189 頁) で次のように述懐している。

西洋音楽については、日本はまだ夜明けの時代であった。ラジオもなければ、レコードもなかなか聴くことが容易ではない。その上、私は大阪府下の濱寺という海岸の松林の中にポツとはなれて住んでいる家の末娘で、だれも私を音楽家にしてやろうと思ってくれた人もなかった。… [中略] …私がじぶんで溺れていったのは、教会の音楽であった。そこには三善和氣という昔の寶塚少女歌劇の作曲者が居て、この人が私にパデレフスキーのレコードを聴かせてくれたりピアノや歌を熱心に教えてくれた。／うちでは、私が音楽をやることは大反対で、ピアノを習わせてくれなかったか

-
- 4 神戸女学院史料室『学院史料』(21 2006.12) 巻末 14 頁「音楽教師一覧」による。
 - 5 永松貞は音楽部オルガン科卒の第 26 回生、長谷川ツヤは普通科第 28 回生 (1911 年卒業)、専門部第 32 回生 (1915 年卒業) である。後者については神戸女学院史料室の佐伯裕加恵氏にご教示頂いたことを記して感謝する。

ら、私はひまさえあれば、教会へゆくと云って、家をとび出し、三善先生の教えを受けていた。(187頁)

このような状態であったから、17歳で音楽部に入学した後、初心者向けの課題を与えられたのも無理からぬことであったと思われる。1925年に画家伊原宇佐三郎と結婚して、1926年に渡欧し、パリでマルグリット・ロン Marguerite Long (1874-1966) に師事した話しはよく知られているが、その際にも技術的には必ずしも満足なものではなかったと、本人が「わが音楽交友録、山田耕柝氏とバッハとロン夫人と」⁶の中で述べている。

正直なところ、私はテクニカルにはなかなか上達しなかったが、曲をよく理解して弾くという点では「ロン先生は」ほとんど満足されていたように思う (142頁)

パリでマルグリット・ロンの門下生の演奏会に出演した件についても、同じ文章の中で次のように説明している。

サルマリヴィオという会場では毎年すこし大がかりなお弟子の演奏会があり、それには私も出た。私はべつに難曲が弾けたわけではないが、その頃日本人のおでは私しかいなかったから珍しがられた。…この会には二年出て三年目には長男が生まれることになったから出なかった。(143頁)

この時の演奏会プログラムが目黒区美術館に寄贈されて残っている。これを見ると、伊原しげ子は1927年6月14日にはショパンのノクターン（何番かは記載がない）を、1928年6月16日にはドビュッシーの〈月の光〉を弾いている⁷。いずれもゆったりとした曲で、あまり手が回らなくても演奏可能な曲と言うこ

6 『音楽の友』(24-6 1966.6) 140～143頁。

7 内容をご教示下さった目黒区美術館の学芸員山田敦雄氏に感謝申し上げる。

とができる。

2) 山田耕筰との師弟関係

由起は山田耕筰の弟子として知られるが、その師弟関係がいつ、どのような形で始まったのかについては諸説があって、先行研究は混乱している。

まず、由起しげ子研究の側から見ると、『女性作家シリーズ6、森茉莉／由起しげ子／萩原葉子』（角川書店、1998）巻末に収められた中地文著「作家ガイド由起しげ子」（454～459頁）には、次のように記されている。

1918（大7）（18歳）プール女学校別科を卒業。この頃、音楽講演で大阪に来ていた山田耕筰に会いに行き、入門する。4月、山田の口ききで家族の承諾を得て、神戸女学院音楽部に入学。女学院で宗教音楽を学ぶかたわら、個人教授で作曲を山田耕筰に、ピアノをロランジに学ぶ。

これを見ると、由起は1918年の春頃に山田に弟子入りしたと読めるが、実際には山田は1917年12月17日から1919年5月24日まで1年半近くアメリカ演奏旅行に出てしまっており、1918年に由起と会う可能性は皆無であった。

一方、山田耕筰研究ではどのように把握されているかを見ると、日本楽劇協会編『この道、山田耕筰伝記』（恵雅堂出版、1982）の巻末年表（252頁）では、1919年のアメリカからの帰国（5月14〔ママ〕日）と「赤い鳥社主催、婦朝歓迎音楽会を帝劇で開催」（6月22日）との間に「作家由起しげ子入門（後年パリでピアノを学ぶ）」が記載されている。かつて日本近代音楽館『山田耕筰年譜』（日本近代音楽財団日本近代音楽館、1996）の作成に当たられ、その際に遺族に由起関係の資料も問い合わせた林淑姫氏にお話を伺った際（2016年8月10日）にも、由起の弟子入りは1919年と考えているとのことであった。

このように先行研究では諸説があって、互いに食い違っているのが実情である。そこで基本に立ち返って、由起自身がどのように述べているのかを検討してみたい。由起は「接ぎ木の枝」において、次のように述べている。

女学校の卒業が近づいて私は、あせっていた。ある早春の日、沈丁花の匂いでにわかにあたりが一変した。私は小さな曲をいくつか五線紙の上に書いてみた。丁度、東京から山田耕筰氏が下阪され、大阪ホテルの広間で近藤柏次郎さんと二人、音楽講演がある、ということを書いたので、私は夕陽ヶ丘高女の音楽の先生に連れていってもらって、会がすんだあとで、紹介してもらった。… [中略] …私がクルクル巻いた五線紙をさし出すと、山田先生は、ひどくびっくりした顔をなさったが「拝見しておきます。あした三木楽器店へいらっしゃい」と云われた。翌日私は入門することになり、山田先生のお口ききで、父もとうとう私を神戸女学院の音楽部へ入れることを承諾した。これでやっと、大っぴらに音楽の勉強が出来るようになったわけだが、家ではあくまでもしぶしぶの態度から一步も出なかった。(187頁)

この文中に出て来る沈丁花は、春の季語として知られる花で、花期は2月末から3月である。1918年も1919年も山田はこの時期には日本にいなかった。とするなら、1917年はどうだろうか。日本近代音楽館『山田耕筰年譜』(5頁)によれば、1917年春に山田は関西で次の活動をしている。

1917(大正6)年(31歳)

2月24日、「山田耕作氏ピアノ作品発表音楽会」(京都)

2月25日、「山田耕作氏ピアノ作品発表音楽会」(大阪)

2月26日、「山田耕作氏ピアノ作品発表音楽会」(神戸)

3月5日、「山田アーベント」⁸(神戸女学院)

このように2月末から3月初旬にかけて、ちょうど沈丁花が咲き薫る時期

8 いずれも演奏曲目は、舞踊詩「彼と彼女」第3、6曲、「日記の一頁(プチボエム集)」(第2曲を除く)、「若いパンとニンフ(若きケンタウルス)」、「夜の歌」「夢囁し」「子どもとおったん」「春雨」「みりの涙」「黎明の看経」、舞踊詩「青い焰」など。

に、山田は関西で複数の演奏会を行っており、一定期間、関西に滞在していたことが明らかである。由起の花好きには並々ならぬものがあると山田が述べている位であるから⁹、「沈丁花の匂い」の記憶は恐らく間違いではないだろう。とするなら、由起こと新飼しげが山田に初めて出会ったのは1917年2月25日と考えられる。

1965（昭和40）年の年末（12月29日）に山田耕筰が亡くなった際、由起は『風景』（悠々会、1966年2月、24～26頁）に「山田耕筰先生のこと」という追悼記事を書いて、恩師山田との初期の交流について、次のように回想している。

考えてみると、私は先生の曲が作られる時、ある時期にはほとんどピアノの横に居合わせたような気がする。一番最初が三木露風さんの詩につけられた「水底の月」で、それは大阪の三木楽器店のピアノの倉庫においてであった。また「風によせて歌える春の歌」や北原白秋さんの「まんじゅさげ」の歌曲は六甲苦楽園の六甲ホテルや東京高田馬場のお住居でだった。口笛でメロディを歌ったり、声で歌ったりしながらピアノで伴奏をおつけになっていたが、またたくまに出来上るので面白かった。私はまだ小娘だったから、あんまりお邪魔でなかったのかもしれない。（25頁）

ここで挙げられている最初の曲、すなわち三木露風作詞の歌曲「みなぞこの月」は、三木楽器店製12段の五線紙を用いて作曲され、自筆譜に「Osaka Sep. 17th 19」と記されているので、1919年9月17日に大阪で作曲したことが知られる。

2曲目の「風によせて歌える春の歌」も三木露風の詩に書かれた歌曲で、山田はこれを1920年4月20、22、23日に苦楽園ホテルで作曲したと初版楽譜（アルス、1922）に明記している。この初版楽譜の「はしがき」には次のように記されている。

9 【印刷物84】「童女と花びら」、山田耕筰、『サンデー毎日別冊』（1950.5.10）29～37。

驟雨のあとだったと思ふ。飄然この部屋への扉を排して歩み入った私は、見なれても見倦きることのない遠望の只中に、五色の虹の巨塔が、恐ろしいほどかがやかに、天と地をつなげているのを見た。しかもその虹は、見る間に足を早めて、歩み去っていくではないか。暫くの間私は我を忘れて燃えのぼる虹の後ろ姿を見送っていた。ふと、自分に帰った私は、何思ふともなく、ピアノの前に坐した。茲に収めた四曲はかうした環境と感興とに堰を切られて、私の衷心から流れいでた思ひ出の深い所産である。

苦樂園六甲ホテルは、山田の定宿の一つで、与謝野廸子『思い出、わが青春の与謝野晶子』（三水社、1984）でも、次のように語られている。「…ホテルには山田耕筈さんが泊まっておられ、夕方、与謝野家の人達とホテルに行った時、広間の灯を暗くして、ピアノを聞かせてくださいました。静かな山の夜のその即興曲はロマンティックな余韻を残し私達を魅了した。そして、私達姉妹は、その瀟洒な山田耕筈さんの紳士ぶりに燕の紳士とあだ名をつけ、いつまでも噂した。」（後藤暢子『山田耕筈、作るのではなく生む』ミネルヴァ書房、2014、301～2頁）

これは上記の「風によせて歌える春の歌」は苦樂園の六甲ホテルで作曲されたという由起の回想と一致するから、苦樂園六甲ホテル¹⁰のこの風景の中に由起もいたことは間違いないだろう。苦樂園六甲ホテルにおける由起との関わりについて、山田は戦後になって、『サンデー毎日別冊』（昭和25年5月10日号、29～37頁）に「童女と花びら——由起しげ子さんのこと——」を寄稿して、次のように物語っている。

私をはじめて重子さんと、西宮の山側にある苦樂園ホテルのサロンで歓談

10 苦樂園六甲ホテル創業者の中村氏は本学卒業生牧野文子の父親で、文子是在学中から生涯にわたって由起の最上の友人であったと言う。由起しげ子「めったに会えぬ人」（『にど だもれ 回想 牧野四子吉・文子』岩波ブックサービスセンター、1988）41頁。ご教示下さった藏中さやか氏に感謝する。

したその日など、私は全く度肝を抜かれてしまつた。私は彼女と話しながらも、ピアノを前にして、しきりに作曲の筆を走らせていた。急に彼女の話し声が途絶えたのは知つていた私ではあつたが、別に氣にもとめず作曲していると、いきなり私の背後から櫻の花ビラを息も止まれとふりそそぐのであつた。後で訊いて見ると、私の無心の姿があまりにくらしいので、袖にいつばい花ビラを忍ばせて來た、というのだつた。

この花ビラ事件については、由起も『音楽の友』第24巻（1966）所収の「わが音楽交友録、山田耕彦氏とバッハとロン夫人と」（140～143頁）の中で、次のように述べている。

東京に出て毎週授業を受けるようになる前は、よく大阪の心齋橋にあった三木楽器店や六甲苦樂園の六甲ホテルへお出かけの折に作ったものを見ていただいていたが、思えばこの頃が楽しい時代だった… [中略] …三木露風さんの「風によせて歌える春の歌」は六甲ホテルで作られたが、それはちょうど春で山には桜の花がいっぱい散っていたのを拾い集め、「君がために織る綾錦」の部分弾いていられるピアノの上に降りまいたりした。「そんなことをすると、いたずらっ子という曲を作りますよ」とおっしゃるのに「いいえ、みんなウソです」って、私も書きますわ、などいい返していた。（141頁）

「君がために織る綾錦」は、4曲から成る「風によせて歌える春の歌」の第2曲で、1920年4月23日の作曲である。おそらくこの日が新飼しげ子のレッスン日であつたと考えられる。

なお、このシーンは由起の作品の中でも取り上げられている。すなわち、『若い火』（河出書房、1956）の中に、次のような回想シーンが織り込まれている。

六甲の山荘で秋吉氏¹¹の弾くピアノの上に、袂にかくしたためた櫻の花片を

吹雪のやうに撒いて驚かせた子供じみた自由さ、その中に自分を甘えさせてみた過信、誤謬、それらは花片の色を集めて紅玉を得ようとするほどの空疎な飛躍であった。(15～16頁)

色彩的な美しいシーンで山田の記憶にも鮮明に残ったのであろう。山田が40年以上経って由起との最初の出会いとして回顧したのは、上述のように、この苦楽園六甲ホテルの一齣(1920年4月)であった。おそらくその前の出会い(1917年2月末の大阪ホテルおよび三木楽器店ピアノ倉庫での出会い)はそれほど強烈な印象を残さなかったのであろう。

以上を整理すると、関係者の述懐や先行研究の記述には大きなバラツキがあるものの、1917年2月25日の大阪ホテルでの出会いが最初で、その際に由起は山田に弟子入りを許されたというのが一番実態に近いと考えられる。その後、1919年9月17日に大阪で三木露風作詞の歌曲「みなぞこの月」が作曲された際にも、1920年4月23日に《風に寄せてうたへる春のうた》の第2曲が苦楽園ホテルで作曲された際にも、由起は山田の傍らにいた。以上が、由起と山田との確実な接点であったと考えられる。

その後、由起は1921年1月に神戸女学院を中退して東京に移り、毎週山田の自宅に通って作曲のレッスンを受けるようになるが、同年秋に脊椎カリエスを発症したとして長期入院し、作曲の勉強を諦めることとなった。

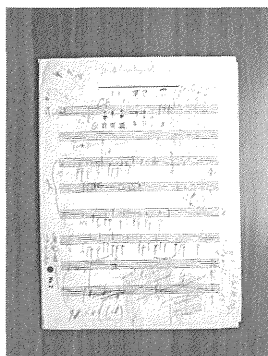
3) 山田耕筰との交流を示す資料

さて、本学に寄贈された由起しげ子資料の中には、由起と山田耕筰との交流を示す貴重な資料が含まれている。それらを順に挙げてみたい。

まず、由起の音楽ノートがごく少数だが、残されている。それらは主に対位法の学習の後を示すものであって、作品と言えるものは残されていない。

11 『若い火』の登場人物である作曲家で指揮者の秋吉行夫は、明らかに山田耕筰をモデルとしている。

【その他8】「楽譜（無題・手書き）」= A 4 版五線紙（8段）（2枚8ページ）内4ページに鉛筆書きで ‘Strict Counterpoint, Scale の逆行、Two parts counterpoint, Triplet, 3 Parts, Consecutive Octave’ 等のメモと譜例が書込まれている。【写真1】



【写真1】「楽譜（無題・手書き）」

【その他自筆73】「雑記帳（音楽について）」

対位法のノート、10ページにわたって、教科書の要点をまとめて書き抜いたものと思われる。「1.2. ハアモニイとカンタポイントの相違の主なるものは、ハアモニイはメロディに対して正しい和音であればいいのに対して、contrapunct は他の一つ一つの part も独立したメロディーであらねばならぬ事」と書き出されている。

由起の「接ぎ木の枝」によれば、山田は「自由作曲をやめて、和声や対位法を勉強するよう指導された。先生の教育は厳格をきわめ、その後東京へ出てからは大中寅二さんと私と、二人つきりのおでしが毎週二回、きめられたコラールを書いて持参する時期が何年か続いた。音楽的にお行儀の悪い私は、この躰でベシヤベシヤになり、あらゆるタブーにひっかかり手も足も出なくなった。…私にもっと豊かな才能があったら、この壁は突き抜けられたであろう。才能が不足でも現在の世の中だったら、もっと自由を主張したであろう。私は外国

音楽の素養が薄手で、その上ひどく潔癖で、ひとりぼっちで、胸の中に抱擁しきれないこんとんとした音楽の幼虫のうごめきを抱きながら、壁の中で悶死しそうな状態になっていた」(186頁)という。上述のノート2点はこのような対位法の勉強の一端を示すものと考えられる。

由起は、自作をすべて破棄したことについて、『音楽の友』第24巻(1966)「わが音楽交友録、山田耕筰氏とバッハとロン夫人と」で次のように触れている。

私は自分が書いたものはみんな片っ端から破き捨て紙屑箱にほうり込んだ。私は「えいっ」と思いながら五線紙を破いた。こんなものに執着してはいけない。こんなものを残すような精神では本当にすばらしい境地へはのほれないと、いつもいつも自分にいいきかせていた。(141頁)

でも、みんな破いて捨てたことだけがせめてものなぐさめかもしれない。(143頁)

こうした次第で、由起の作品は残されていないが、それは由起の作品が印刷に値しなかったからという訳ではないらしい。山田に出版を勧められたのに、それを由起が拒絶したというのが実態のようである。その経緯が「わが音楽交友録、山田耕筰氏とバッハとロン夫人と」の中で、次のように記されている。

フランスから帰り、香蘭ビルにご挨拶に行くと、先生はよもやま話しのあいだに、今度作品集を出版するから、フリージャとトマト畑の譜をいれてあげるから探していらっしゃいとおっしゃった。私は思いがけぬことでちょっと嬉しかったが、その譜面は見つからないし、よく考えると、これにも先生の訂正の赤鉛筆が入っていたことを思いだし、何だかそれを自分のものとはいい切れぬ気がしてついに持参しなかった。先生は、ときどき催促し、おかしい人ね、あなたって人は、とお笑いになった。でも、今になっても私は、それでよかったと思っている。つまりぬ曲が一つ二つ印刷

になったってまったく無意味なことではない。(141頁)

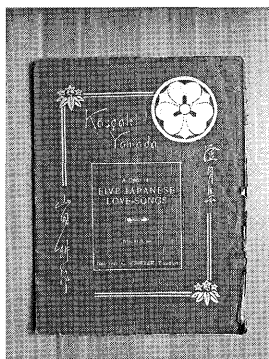
少なくとも山田が作品集に入れて出版してもおかしくないと評価するだけの作品を由起は書いていたはずだが、それらは破棄されてしまって現存していない¹²。

資料の問題に戻ると、次に、本学の由起しげ子資料には山田の作品の出版譜が5点含まれており、いずれにもサインがされている。サインの日付を手掛かりにこれらを分類すると、次の3グループに分けることができる。

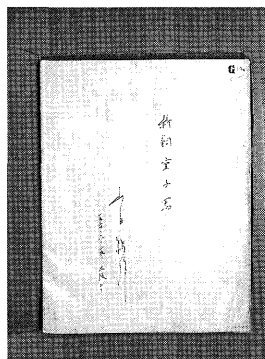
第1グループ：1924年6月29日、大阪にて

【その他4】「澄月集」= *Kōsçak Yamada: A Cycle of Five Japanese Love-Songs*, 山田耕作¹³、澄月集 (New York, G. Schirmer, Boston, s. d.)

表紙裏の遊び紙にペン書きで「新飼重子君、山田耕作、1924-6-29、大阪にて」の献呈署名あり。【写真2、3】



【写真2】「澄月集」表紙



【写真3】「澄月集」献辞

12 本稿入稿後に由起しげ子作曲の校歌が2曲あるとの情報を藏中さやか氏から頂戴した。これについては稿を改めて扱いたい。

13 山田は1933年に「耕筈」と改名しており、それ以前は「耕作」であった。

第2グループ：1924年8月11日

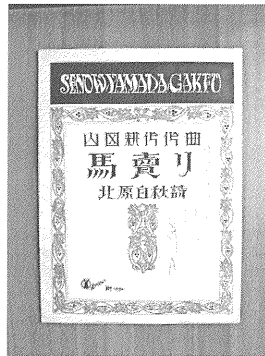
【その他2】「Oto no Nagare」= *Oto no Nagare, Stream of Tone, Ten short poems for Piano, by Kósçak Yamada, Oliver Ditson Company, Boston, Made in U.S.A.*

最終ページ (p.22) 末に 'Tokio, December, 1915' と印字されている。
内表紙に「Shigeko Shinkai ——1924.8.11——」のペン字書込み（おそらく由起の手）。

第3グループ：1926年5月8日、東京

【その他1】「馬売り」= 山田耕作作曲『馬売り』北原白秋詩（セノオヤマダ楽譜 No.1034、セノオ音楽出版社、大正15年2月）

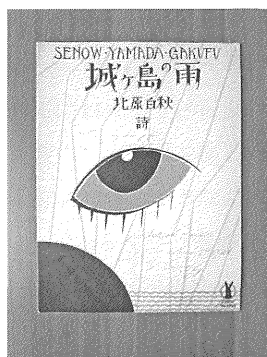
表紙に細いペン書きで「伊原重子君に、渡欧を記念して、一九二六、五、八、耕作」の献呈署名あり。【写真4】



【写真4】「馬売り」

【その他3】「城ヶ島の雨」= 山田耕作作曲『城ヶ島の雨』北原白秋詩（セノオヤマダ楽譜 No.1036、セノオ音楽出版社、大正15年2月）

表紙に細いペン書きで「To my dear pupil Shigeko, Kósçak Yamada, May 8th 1926, Tokyo」の献呈署名あり。【写真5】



【写真5】「城ヶ島の雨」

【その他5】「ペチカ／よしきり」=『山田耕作作曲、ペチカ、北原白秋詩、よしきり、三木羅 [ママ] 風』（セノオヤマダ楽譜 No.1033、セノオ音楽出版社、大正13年12月）

表紙に細いペン書きで「To my dear pupil Mrs. I. Shigeko, Kósçak Yamada, May 8th 1926, Tokyo」の献呈署名あり。【写真6】



【写真6】「ペチカ／よしきり」

第1グループの『澄月集』は記念すべき山田の最初の印刷譜で、アメリカで

1918年頃に出版されたものである。これを山田は1924年6月29日に大阪で由起に贈っている。一方、第2グループの『Oto no Nagare』もアメリカで1922年に出版されたものだが、この楽譜のサインは山田の筆跡でなく、由起が自分で書き込んだものと考えられる。第3グループの3点はいずれも由起の渡欧の饒別として1926年5月8日に東京でサインされている。この第3グループの楽譜は3点とも「セノオ・ヤマダ楽譜」である。「セノオ・ヤマダ楽譜」は山田が妹尾幸陽¹⁴（1891-1961）の協力を得て1924年8月に出版を開始した一連の楽譜で、恩地孝四郎の装幀によってデザイン性の高い楽譜に仕上がっている¹⁵。

さて、由起と山田の交流は由起の結婚と渡欧によって大きく変化したものの、これで途切れた訳ではなく、その後も長く続けられたことが複数の資料から確認できる。これについて山田は「童女と花びら——由起しげ子さんのこと——」の中で次のように述べている。

伊原氏との結婚生活はおのずと私どもの師弟関係を稀薄にした。重子さんの結婚に至るまでの過程をつぶさに知っている私にとつて、それは受けとりにくい謎として今でも私の頭にのこされている。結婚後は全く往き來しない私共ではあつたが、それでも年に一回、つまり私の誕生日がくると、いつでも電話で祝辞を述べてくれるばかりか、美しい花束を贈ってくれる彼女であつた。

この美しい習慣を証しする手紙が、由起しげ子資料の中にある。1959年6月10日付で山田が由起に書いた礼状である。そこには次のように記されている。

14 妹尾幸陽は、時事新報記者を経て日本放送協会に転じ、1925年の本放送開始時には洋楽主任を務めた。1910年から楽譜出版に手を染め、1915年には「セノオ音楽出版社」を設立し、楽譜出版の傍ら、音楽評論、訳詞、作曲も手がけるなど、多岐にわたる活躍を行なった。

15 後藤暢子『山田耕稼著作全集』第3巻（岩波書店、2001）813頁。

【書簡3】「由起しげ子宛山田耕筰書簡（1959年6月10日付）」

「昨日は見事な花をありがとう、嬉しく／拝見しました。私もとうとう六十三に／なりました。一度御枉駕下さい、うまい／めしでもご一緒しましょう／十日、耕作／由起しげ子さま／ご本いただく前に一日で／読了／、とても愉快に拝読しました」（封筒に「昭和34年6月10日」原宿アパートメントの山田から、世田谷五の二九二〇公団住宅501の由起しげ子へ）

由起も追悼記事の「山田耕筰先生のこと」の中で、「私はもう何十年も毎年六月九日の先生のお誕生日にはきごとご挨拶に伺う習慣をもっていた。他の日にお訪ねしたのはきわめて稀であった。昨年の最終となったその日にも病院へお祝いを述べに行った」（25頁）と書いており、この習慣を山田が亡くなる前年まで続けていたことが知られる。

このように、由起の作曲修行は青春時代のわずか数年のことではあったが、師弟としての交流は生涯にわたって続いたこと¹⁶が、由起しげ子資料によって明らかとなった。

おわりに

以上の検討から、1) 由起しげ子こと新飼志げは、神戸女学院音楽部在学中、ピアノとオルガンと歌の3種のレッスンを並行して受け、その教材は主に初学者用のものであったこと、2) 山田耕筰との師弟関係については、その始まりがいつであったかという点で先行研究には大きなバラツキが見られたが、関係史料を精査した結果、1917年2月25日の大阪ホテルでの出会いが最初で、その際に由起は山田に弟子入りを許されたと考えられること、3) 由起の長期入院と結婚・渡欧によって作曲の勉強は放棄されたが、それでも山田との交流は生涯にわたって続いたこと、が明らかとなった。

16 山田との交流について、芥川賞受賞の頃を記す【日記4】昭和24年に、「5月29日山田家へゆく、先生呂律あやしきも御きげんよろし」「8月3日受賞式山田先生にお会ひする」とあるのを藏中さやか氏から教示頂いた。感謝して記す。

なお、相原和邦は「由起しげ子」（馬渡憲三郎編）（『女流文芸研究』南窓社1973）において「かなりの数に上る中間小説は別として、由起文学の全体を大きく見渡せば、自己およびその周辺者の体験に取材した身辺小説と自己を伏せて虚構化した客観小説とに二分できよう」（261頁）と述べている。本論中で言及した由起の小説『若い火』（河出書房、1956）は明らかに「身辺小説」としての性格が顕著で、そこには藤島則子（由起しげ子）と秋吉行夫（山田耕筈）と朝吹隆志（井原宇三郎）を中心として、由起の音楽修行を含む描写がふんだんに盛り込まれていると思われるが、小説として書かれたものを事実とどこまで関連づけることができるかは難しい問題であり、本論では踏み込まないことを基本としたことを付記する。

《付記》

本研究は、神戸学院大学研究所の2016年度総合研究助成によって支えられていることを記して感謝する。